



C1912 『もろびとこぞりて』

## [今月の聖書]

イエスがヘロデ王の代に、ユダヤのベツレヘムでお生れになったとき、見よ、東からきた博士たちがエルサレムに着いて言った、「ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので、そのかたを拝みにきました」。ヘロデ王はこのことを聞いて不安を感じた。エルサレムの人々もみな、同様であった。そこで王は祭司長たちと民の律法学者たちとを全部集めて、キリストはどこに生れるのかと、彼らに問いただした。(マタイ 2:1-4)

「暗やみの中に歩んでいた民は大いなる光を見た。暗黒の地に住んでいた人々の上に光が照った。」(イザヤ 9:2)

わたしの支持するわがしもべ、わたしの喜ぶわが選り人を見よ。わたしはわが霊を彼に与えた。彼はもろもろの国びとに道をしめす。彼は叫ぶことなく、声をあげることなく、その声をちまたに聞えさせず、また傷ついた葦を折ることなく、ほのぐらい灯心を消すことなく、真実をもって道をしめす。彼は衰えず、落胆せず、ついに道を地に確立する。海沿いの国々はその教を待ち望む。(イザヤ 42:1-4)

イエスは、また人々に語ってこう言われた、「わたしは世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう」。(ヨハネ 8:12)

メリークリスマス！お元気でお過ごしでしょうか。クリスマスの喜びと希望が豊かに与えられますようにお祈りしています。東方の博士たちがベツレヘムの家畜小屋の中まで来て礼拝しようとした赤ちゃんは、全世界の救い主、メシアでありました。単にユダヤの出来事ではなく、全世界の人々の祝福となるまことの王であるお方の誕生でした。昔々バビロンに捕えられていたユダヤ人の青年たちは、700年にも及ぶ歴史の中でペルシャの天文学者達となっていました。木星と土星が天球上の魚座で相合するという出来事がBC7年5月、10月、12月と3回あったと考えられます。木星は偉大なこと、素晴らしい出来事。土星はユダヤの星。魚座は歴史の終わりであり、新しい歴史の始まりを意味します。ペルシャの天文学者たちはこの不思議な出来事を見逃しませんでした。すべての財産を宝物に変えて2000マイルを超える旅をしてベツレヘムを訪ねたのです。このような不思議な出来事は、救いを待ち望む渴望がなければ遭遇できません。

今日もクリスマスは救いを探し求める人々の祈りに対して与えられる天からのプレゼントです。中学1年生の12月2日に兄から聞いた「アルタバンの旅」という物語が、少年の目を開きました。私たちの人生が本物の輝きを見いだすためにイエス・キリストの救いが必要です。今年のクリスマスが今までに増して喜びと輝きに満ちたものとなりますようにお祈りしています。



不思議な星は あなたを救う 神様からの約束  
悲しみ尽きず 闇暗くても  
世界の人に メリークリスマス  
静かに 露のように  
ふりそそぐキリストの愛  
不思議な星は 希望のしるし  
世界の人に メリークリスマス

小田 彰

## (お知らせ)

### \* 地区集会のご案内

12月18日(水) 11:00 水曜礼拝(自由が丘チャペル)

\* 12月11日(水) 19:00 東日本大震災復興支援超教派一致祈祷会(淀橋教会)

\* 12月7日(土) 15:30 メリークリスマスイン青山が今年も開かれます。ぜひおいでください。

(青山学院内グローリーチャペル チケット 1000円)

\* 2020年2月29日(土) 13:30 メサイア 2020 紀尾井ホール

## 「あるクリスマスの思い出」

1960年12月2日(土) 中学1年生の学期末試験のために準備をしていた私は、12時を回って、コタツの中で兄と会話していました。この兄小田満は現在北海道で牧師をしております。当時教会の青年会で「アルタバンの旅」という劇を演じていた兄は、その物語を実にリアルに私に語ってくれました。

3人の博士たちと合流してベツレヘムのメシアを礼拝したいと願ったペルシャの第4人目の博士、それがアルタバンでした。星を研究し、世界の救い主の到来を知り、命がけの旅をしてベツレヘムまで行こうとしたアルタバンは、仲間との待ち合わせ時間に遅れたという理由で、一生涯キリストのお姿にはお目にかかれなかったというわけです。

そのストーリーは今月のメッセージで語ったように美しいエンディングに至るのですが、途中まで話を聞きながら私は涙が溢れて、「神様私を救ってください」と言う叫びと祈りに導かれてしまいました。兄はただ物語を語ったに過ぎないのに、弟が涙を流して悔い改めを始めたので戸惑ったようでした。

私はクリスチャンの家庭に育ち、兄弟たちは次々と洗礼を受け、天国に行く約束をいただいているかのように感じていましたが、私はまだそのような気持ちには至っていませんでした。

その少し前に私が通っていた日曜学校で、たまたま日曜学校を休んだ小学校2年生の男の子が、野球の帰りに千葉駅の近くの交差点で、バスの後輪にひかれて死んだと言う出来事に遭遇していました。その日、日曜学校の帰りにその交差点に残っていた血痕を今でもはっきりと覚えています。その出来事があったためか、私の心には「いつか死ぬんだ」という意識があり、このままでは天国にはいけないと言う思いが心を塞いでいました。きっとそのことも大きな原因だと思いますが、3人の博士に会えなかったと言う偶然の出来事が一生を左右するのだ、あるいは永遠の命を左右するのだということに気づいた瞬間、涙があふれ、「僕はどうしたらいいんだろう?」と言う叫びが出てきたのです。

兄はヨハネ第一の手紙1:9を開いて悔い改めを教えてくださいました。翌日、日曜日の昼、父に「僕は悔い改めました。クリスチャンになります」と告白し、夜には母に財布の中から勝手に取ったお金を返してお詫びをしました。その月の25日、私は洗礼を受けたのです。それから60年経って「アルタバンの旅」が私の信仰の起点になったと言うことを思い起こしている昨今です。

小田 彰

